（様式１）

平成２４年度試験研究課題設定のための要試験研究問題提案・回答書

（整理番号）１０４	**提案機関名**	（社）神奈川県園芸協会（県果樹組合連合会）

要望問題名	ナシの萎縮病対策について
要望問題の内容　【　背景、内容、対象地域及び規模（面積、数量等）　】 ナシの萎縮病が経営に及ぼす影響は極めて大きく、特に主力品種である幸水での発生が多く、品種間の差異も見受けられ、ナシ経営安定への大きな課題とされている。 近年、サルノコシカケ科の材質腐植菌による説や道管水柱が切れる通水機能低下による水分ストレス説などの検討が進み新たな展開を迎えている。現在、本県で再現試験も試みられているが、まだ確定されていない。 平成２３年は、前年の猛暑の影響からか発生も多く、生産力の低下が見受けられる。現在萎縮病を発生したものは回復が難しく、伐採し新たな植栽により更新するしか対応策が無いのが実態である。そこで経済的に樹勢が低下する発現前の超早期診断法や回復技術の早急な対策をお願いしたい。	
解決希望年限	①１年以内　②２～３年以内　③４～５年以内　④５～１０年以内
対応を希望する研究機関名	①農業技術センター　②畜産技術センター　③水産技術センター ④自然環境保全センター
備　考	

※　ここから下の欄は、回答者が記入してください。

回答機関名	農業技術センター	**担当部所**	果樹花き研究部

対応区分	①実施　②実施中　③継続検討　④実施済　⑤調査指導対応　⑥現地対応　⑦実施不可
試験研究課題名　（①、②、④の場合） ナシ樹体ジョイント仕立てによる安定、省力生産技術の開発 (1)ナシ樹体ジョイント仕立ての栽培優位性検証 イ　萎縮症発生の可能性検証	
対応の内容等 ナシの萎縮病に関しては、両原因説から「樹体ジョイント仕立て」が主枝分岐部を持たず、主枝先端部にかかる水ストレスも少ない樹体の構造により、萎縮症状が発生し難い栽培法として着目されており、その発生の可能性について平成22年度より検討を進めています。早期診断技術に関しては、これまでの研究で主枝内部の枯れ込み状態を応力波伝播速度計測により非破壊的に視覚化することを検討し、第１亜主枝より下部の直径 20cm 程度の比較的太い主枝部であれば、安定的に視覚化が可能なことが分かりました。しかし、枯れ込みが進行した状態での診断であり、今回ご提案いただいた超早期診断については不十分とも考えられます。 そこで、樹体への水ストレスに着目し、夏期の葉温上昇から超早期診断が可能なのか、現地でも比較的容易に利用できると考えられるサーモグラフィを使った診断法について進行中の課題の中で実施したいと思います。	
解決予定年限	①１年以内　②２～３年以内　③４～５年以内　④５～１０年以内
備　考	